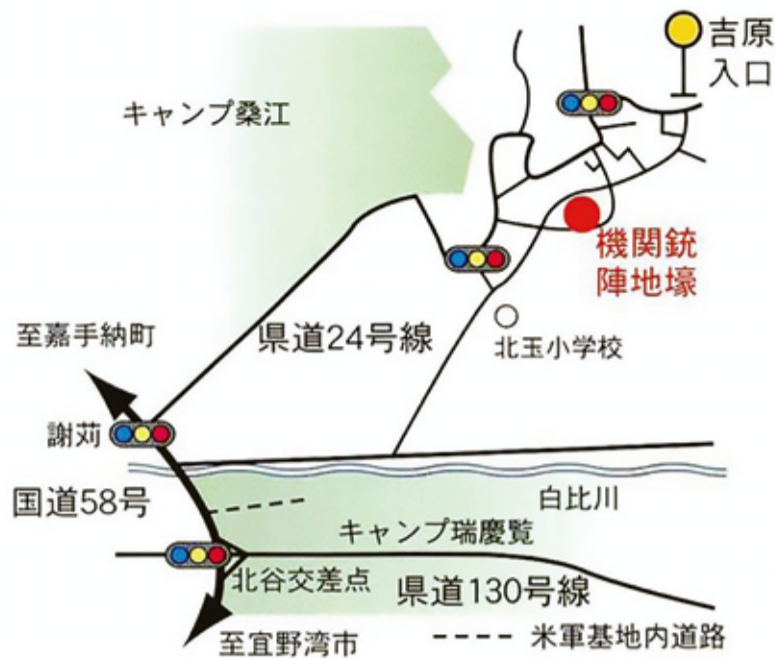


機関銃陣地壕



所在地：北谷町字吉原289番

立地(標高)：山腹(約70m)

形態：人工壕

種別：陣地

現状：一部に落盤がみられるが、比較的良好

保存状況：丘陵の中腹に所在するため放置されている

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：陣地

主な遺構：陣地坑道、小部屋



陣地壕の残る丘

機関銃陣地壕は、北玉小学校より北東へ約300mに位置する標高約80mの丘陵中腹に所在する。

陣地壕内部には壕口①から入壕するが、周辺の雑木林を伐採しなければ進入できず、また、丘陵裾野と壕口①の床面までの標高差が約3mあり、45度程度の斜面を有しているため、よじ登るように入壕する。壕口②から④はそれぞれ600以上の急斜面にあるので、入壕が不可能である。壕口①、②附近坑道の床面は約10cmの埋土が見られる程度であるが、壕口③、④附近坑道は、天井や壁面が崩落しその埋土は80cm～140cmを測る。

壕内部を形成する土壌は、第3紀砂岩(ニービ)と第3紀泥岩(クチャ)の混合層であり、天井部が概ね泥岩であるのでその風化土が埋土として現れている。しかし、壕口①、②附近坑道は丘陵山頂から染み出る雨水により一部の天井、壁面が鍾乳化しているため崩落が少ないものと思われる。

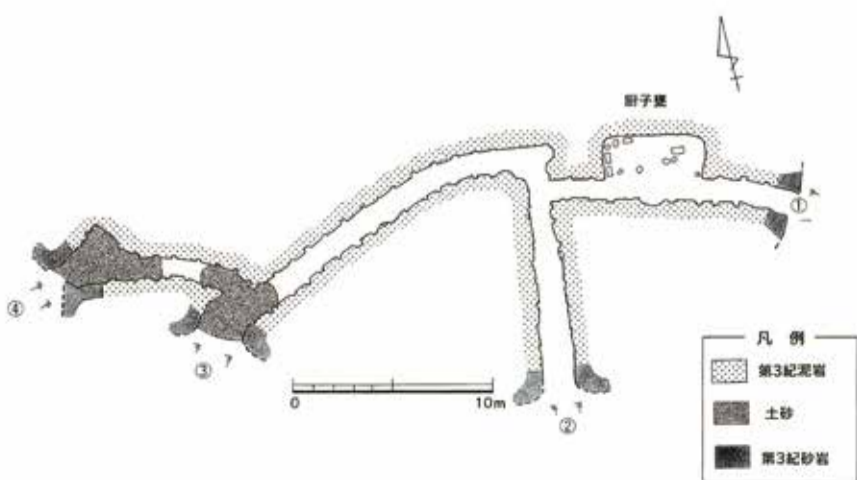
内部の遺構は、東西に延びる坑道を主とする。坑道は、概ね130cm間隔での坑木跡が見られる。埋土が少ない壕口①附近坑道の坑木跡1基の表土を、約120cm除去すると沖縄戦当時の地山が現れたが、坑木に打ち込む釘や鋸、坑木の破片等の遺物は確認できなかった。

坑道①の北側壁面に、幅約5m、奥行き約2mの小部屋が見られるが、当時の用途は不明である。この小部屋には厨子甕が10基(御殿型厨子甕5基、マンガン掛け厨子甕5基)配置されているが、銘書は無く埋葬者等を特定することは出来なかった。厨子甕は表土上に置かれていることから、戦後に移転されたものと思われる。

当陣地が所在する北谷町吉原の周辺には、1944年8月以降、第62師団独立歩兵第15大隊と第23大隊が配置されていた。これらの部隊は、同年12月、配備変更で本島南部へ移駐するまで、地域の住民を動員しながら陣地壕などを構築していた。12月以降、替わってこの地に駐屯したのは、独立混成第15連隊である。当壕が機関銃陣地といわれるのは、当時を知る地元住民がそう呼んでいるためで、陣中日誌によると、独立混成第15連隊第3機関銃中隊が1944年12月6日に北谷村佐久川・上勢頭に移駐したことが確認できる。しかし、当壕がこの部隊によって構築され、実際に使用されたかについては、聞き取りや文献調査が不十分なため、現在のところ不明である。



坑木後の残る壕内



機関銃陣地壕平面遺構図



壕内の棚状遺構